

# 『家具公定価格集』「桐箆笥長持類」規格表の摘要

戦時下日本の実用家具のデザインと技術の特質解明・桐箆笥編(1)

Summary of Specification Tables for "Paulownia Chest of Drawers" in "Furniture Official Price List":

Clarification of Characteristics of Design and Technology of Utility Furniture in Wartime Japan: Paulownia Chest of Drawers (1)

新井竜治 1)

谷本尚子 2)

益岡 了 3)

Ryuji ARAI

Naoko TANIMOTO

Ryo MASUOKA

1)九州大学総合研究博物館

2)京都精華大学デザイン学部

3)大阪工業大学ロボティクス&デザイン工学部

**Abstract:** In specification tables for "Paulownia Chest of Drawers" in "Furniture Official Price List," there are classifications according to (a) Width and use, (b) Parts of paulownia wood used, (c) Detailed structure, and (d) Drawer numbers. The detailed specifications of the furniture official price list are determined by combinations of factors from each

classification. Among these, (b) classification by the parts of paulownia wood used is the most important classification. In particular, there is a crucial difference between (5) All paulownia and the rest; i.e. (1) Front paulownia, (2) Two-sided paulownia, (3) Three-sided paulownia, and (4) Four-sided paulownia.

**Key Word:** Paulownia Chest of Drawers, Furniture Official Price List, Utility Furniture

## 1. はじめに：目的・方法・背景

本稿の主な目的は、(A)戦時下の価格等統制令(商工省)により告示された『家具公定価格集』(家具指物新聞社、1943年)の「桐箆笥長持類」における規格表(以下「規格表」と略記)の要点を明らかにすること、および(B)現(2025年)時点ではもはや不明な文言の意味を明らかにすることである。

(A)規格表には、(a)巾寸法・用途による分類、(b)桐材使用部位による分類、(c)細部構造による分類、(d)引出割りによる分類があり、それぞれの構成を分析した。(B)不明な文言の意味を明らかにするために、(e)価格集と同時期の文献、榎本安五郎『箆笥と鏡台』(洋学社 1937年)、松本朝之助『模範日本箆笥の意匠と其製作の仕上げ』(中央工学会 1934年)を参照した。(f)京都・宮崎木材工業・伏見工場、東京四ツ谷「箆笥の松本」等において、戦前期・戦中期の歴史的桐箆笥の実物を調査した。(g)松本朝之助氏の孫・松本義明氏、京都・宮崎木材工業・伏見工場の藤田智史氏への聞き取り調査を実施した。(C)京都・宮崎木材工業で公定価格品の現物が発見された。この現物と規格表を対比させて、規格表を正しく解説することができたか確認した。

『家具公定価格集』「洋家具類」の類型は『洋家具類銘柄参考図集』(全日本洋家具商工連盟、1943年)に図示されている[注1]。しかし、同価格表の「桐箆笥長持類」の類型をそのまま図示したものは遺されていない。当時の人々は文言だけで理解できたと推定されるが、今日、その類型がどのようなものであったかは、様々な資料を組み合わせる必要がある。

## 2. 規格表の構成

### 2.1. 巾寸法・用途による分類

桐箆笥長持類は、規格表において、巾寸法・用途により、①3尺型箆笥、②3尺8寸型箆笥、③4尺型箆笥、④洋服箆笥、⑤子供箆笥、⑥湯具箆笥、⑦用箆笥、⑧手許箆笥、⑨蓋引長持、⑩開又は引戸長持に区分されている。高さ寸法については、主として3尺5寸5分高、5尺5寸5分高の2通りの公定価格が示されている。また同じ引出割りでも、高さが2寸・3寸異なる規格がある。これは全国统一規格を制定する上で、各地方で異なる高さに対応するためであったと考えられる[注2]。

### 2.2. 桐材使用部位による分類

桐箆笥長持類は、規格表において、桐材の使用部位により、下位から上位へ、(1)前桐、(2)二方桐、(3)三方桐、(4)四方桐、(5)総桐に区分されている。榎本安五郎『箆笥と鏡台』(pp. 24-25)の記述から、①～⑤の各規格における桐材の使用部位を表1に

整理すると、(1)前桐とは本体の前板のみ桐材で、他の部位は杉材/樅材であるもの(以下同じ)。(2)二方桐とは前板・天板のみが桐材、(3)三方桐とは前板・天板・両側板のみ桐材、(4)四方桐とは前板・天板・両側板・背板が桐材(棚板・地板は杉材/樅材)であるものである。(1)～(4)の棚板は杉材/樅材であるが、前面の棚口には小幅な桐材または桐面材を使用するので、前面はすべて桐材となる。(5)総桐とは、後述する細部構造の等級別に厚みの差はあるが、すべての部位に桐材を使用するものである。引出内部については、(5)総桐のみ入側(引出側板)・先板(向板)・底板すべてが桐材であるが、(4)四方桐では入側のみ桐材、(1)前桐～(3)三方桐ではすべて杉材/樅材である。

### 2.3. 細部構造による分類

桐箆笥長持類は、規格表において、細部構造により、①上羽、②前通、③奥四分、④天四、⑤天八、⑥中保、⑦上天、⑧天井に区分されている。この細部構造用語の定義を確定するために、規格表(a)巾寸法用途別分類の3尺型箆笥と4尺型箆笥の(b)桐材使用部位別分類における(c)細部構造用語の適用状況を表2に整理すると、①上羽は(1)前桐・(2)二方桐・(3)三方桐、②前通は(1)前桐・(3)三方桐・(4)四方桐・(5)総桐、③奥四分、④天四、⑤天八は(1)前桐・(3)三方桐・(4)四方桐に適用されている。⑥中保、⑦上天、⑧天井は(5)総桐だけに適用されている。①上羽が最下位、⑧天井が最上位である。これは(b)桐材使用部位別分類が最も重要な分類であることを示している。特に(5)総桐とそれ以外の(1)前桐～(4)四方桐には決定的な違いがある。

次に「上羽/上端」(うわば)とは、見懸り側(外部に面した側)の端部の材の厚みは厚いが、外側から見えない部分の材の厚みを薄くするという「構造用語」である。厚い材と薄い材の接合部分の形状は、(1)厚い材の断面形状が矩形のままのもの、(2)厚い材の角にテーパを掛けて薄い材に接合しているもの[注3]に大別される。そして上羽/上端ではない状態、つまり端から端までの厚みが均一である状態を「通し」(とおし)と呼ぶ。構造用語としての「上羽/上端」「通し」は、水平方向の棚板の断面形状のみならず、垂直方向の前板・帆立板・入側・先板などの断面形状にも適用される(図1)。そして、格付表では、本来「構造用語」である「上羽」「通し」を「格付用語」として転用している。その意味は以下のとおりである[注4]。

- ①上羽：前板も含めて、すべての部材が上羽になっているもの。
- ②前通：前板のみが通しで、他はすべて上羽になっているもの。
- ③奥四分：引出側板は「入側」(いりかわ)とも「奥行」とも

表1 桐材使用部位別分類と実際の桐材使用部位

部位 分類	本 体						引 出		
	前板	上台 天板	両側板 (左右 帆立板)	背板	棚板	地板	入側 (引出の 側板)	先板 (向板)	底板
(1)前桐	○	—	—	—	—	—	—	—	—
(2)二方桐	○	○	—	—	—	—	—	—	—
(3)三方桐	○	○	○	—	—	—	—	—	—
(4)四方桐	○	○	○	○	—	—	○	—	—
(5)総桐	○	○	○	○	○	○	○	○	○

【凡例】「○」桐材、「—」杉材/樺材

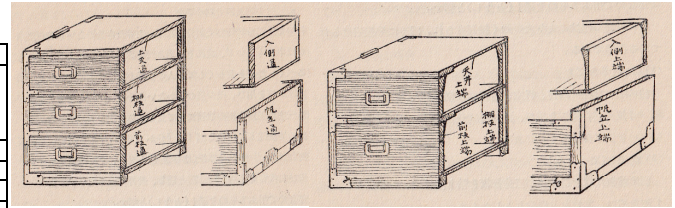


図1 構造の断面(通り・上羽/上端)

榎本安五郎「第16図 構造の断面」『筆筒と鏡台:木材工芸叢書14』洪洋社, 1937年, p.35

表2 巾3尺型4尺型筆筒の桐材使用部位別分類の細部構造

巾寸法・用途 巾寸法・用途別 分類	桐材使用部位別分類				
	(1)前桐	(2)二方桐	(3)三方桐	(4)四方桐	(5)総桐
①3尺型 筆筒	①上羽 ②前通 ③奥四分 ④天四 ⑤天八	①上羽 —	①上羽 — ②前通 ③奥四分 ④天四 ⑤天八	— ②前通 ③奥四分 ④天四 ⑤天八	— ②前通 ③中保 ④上天 ⑤天井
	②前通 ③奥四分 ④天四 ⑤天八	— — — —	— ②前通 ③奥四分 ④天四 ⑤天八	— ②前通 ③奥四分 ④天四 ⑤天八	— ②前通 ③中保 ④上天 ⑤天井

【凡例】「—」該当なし



図2 品番規格番号 86

3尺型筆筒、四方桐、天八(七抽斗ニツ重若ハ延又ハ大開延)、巾3.00尺、高3.55尺、奥1.4尺、等級1、木地(台輪附)最高販売価格 82.10円

呼ばれたので、「奥」は奥行、つまり引出側板を指す。この規格は、②前通の状態に加えて、引出側板の厚みが四分(12mm)の通しであるもの。

④天四：③奥四分の状態に加えて、上台の天井板の厚みが四分(12mm)またはそれ以下の通しであるもの。

⑤天八：③奥四分の状態に加えて、上台の天井板の厚みが八分(24mm)またはそれ以下の通しであるもの。

⑥中保(ちゅうほ)：総桐筆筒の最下位品。すべての部材は桐材だが、すべての部材の構造が上羽のもの。

⑦上天(うわてん)：総桐筆筒の中級品。帆立板と入側(引出側板)が通しで、他はすべて上羽になっているものを「入側」と呼ぶ。これに加えて上台の天井板が通しになっているものを「上天入側」または単に「上天」という。

⑧天井：総桐筆筒の最上級品。棚板以外、すべての部材が通しになっているもの。七分(21mm)通しを七天、八分(24mm)通しを八天と呼ぶ。これに加えて棚板まで通しの特上品を「天井棚通」または単に「棚通」(たなとおし)と呼ぶ。

## 2. 4. 引出割りによる分類

桐筆筒長持類の規格表には、[1]四抽斗・五抽斗・六抽斗・七抽斗・十割抽斗、[2]ニツ重又は延・三ツ重、[3]中開下二抽斗・中開下三抽斗・大開下三抽斗などの表記が見られる。これらの用語の意味は以下になる。

[1]四抽斗・五抽斗・六抽斗・七抽斗・十割抽斗：引出の数が4、5、6、7、10杯であることを指す。

[2]ニツ重又は延・三ツ重：本体が2段重ね、1本立、3段重ねであることを指す。

[3]中開下二抽斗・中開下三抽斗・大開下三抽斗：中開下ニ/三抽斗とは、三ツ重の上台に引き違い戸付きの小物入れと小引出3杯、中台の両開き戸の中に盆が3~4枚入り、下台に大型引出が2~3杯あるもの。大開下三抽斗とは、ニツ重の上台の大きな両開き戸の中に盆が6~7枚入り、下台に大型引出が3杯あるものを指す[注5]。

## 3. 桐筆筒類の公定価格品の事例による検証

京都・宮崎木材工業・伏見工場の実物調査において公定価格査定証紙が最上段引出の先板の内側に貼られた筆筒が見つかった(図2)。証紙には「○公 木地証、商工省告示203号、品番

規格番号86、等級1、支部番号27、支部員番号4403、(税別)木地販売価格82円10[銭]、社団法人日本家具統制協会(新漢字改め)と記されている[注6]。「木地」とは木部の加工組立を終えた状態のものである。この木地は製造卸業者に納品されて、塗装され金具が付けられて、通常は小売業者に納品されて、一般消費者に販売される。「品番規格番号86」は、規格表の「3尺型筆筒、四方桐、天八(七抽斗ニツ重若ハ延又ハ大開延)、巾3.00尺、高3.55尺、奥1.4尺、等級1、木地(台輪附)最高販売価格82.10円」に該当する。実際の桐筆筒は巾907mm、高さ980mm、奥行417mm、引出7杯、1本立、四方桐(ただし棚板・地板のみ杉材、引出先板・底板は桐材)、天井板の厚み18.5mmであり、確かに品番規格番号86の規格に適合したものである。

## 4. おわりに

『家具公定価格集』『桐筆筒長持類』の規格表には、(a)巾寸法・用途(①3尺型筆筒、②3尺8寸型筆筒、③4尺型筆筒、④洋服筆筒、⑤子供筆筒、⑥湯具筆筒、⑦用筆筒、⑧手許筆筒、⑨蓋附長持、⑩開又は引戸長持)、(b)桐材使用部位((1)前桐、(2)二方桐、(3)三方桐、(4)四方桐、(5)総桐)、(c)細部構造(①上羽、②前通、③奥四分、④天四、⑤天八、⑥中保、⑦上天、⑧天井)、(d)引出割り([1]四抽斗・五抽斗・六抽斗・七抽斗・十割抽斗、[2]ニツ重又は延・三ツ重、[3]中開下二抽斗・中開下三抽斗・大開下三抽斗など)という分類があり、それぞれの組合せによる詳細な規格が定められている。この中で、(b)桐材使用部位別分類が最も重要な分類である。特に(5)総桐とそれ以外の(1)前桐~(4)四方桐には決定的な違いがある。

## 注及び参考文献

- 1) 新井竜治：昭和戦前期の『家具公定価格集』に基づく『洋家具類銘柄参考図集』の特質、芝浦工業大学研究報告, 2015, pp. 49-58
- 2) 宮崎英治郎：宮崎百二十年の歩み, 193-223, 1975, 特にpp. 205-6には桐筆筒規格の東西統一時の困難が記されている。
- 3) 片面だけにテーパをかけた板材を長押挽板(なげしびきいた)・刃挽板(じんびきいた)と呼ぶ(松本朝之助：p. 85)。
- 4) 榎本安五郎：筆筒と鏡台, 洪洋社, 33-38, 1937
- 5) 埼玉筆筒同業組合：筆筒用筆筒寸法案, 1931
- 6) 等級は見懸り(正面/周囲)・工作・着色加工金具で1~3級に区分。 ※本研究はJSPS 科研費 24K03223 の助成を受けたものである。